KYOTO PHILOMUSICA ORCHESTRA

41st CONCERT

25 JUNE 2017

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- 携帯電話･アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。

- 演奏中の私語は固くお断りいたします。

- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。

- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。

- 「せきエチケット」にご協力ください。せき、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。

  なお、演奏中の「のどあめ」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。

- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。

京都フィロムジカ管弦楽団
第41回定期演奏会

2017年6月25日（日）午後2時開演

大津市民会館　大ホール

曲目

ホルスト／『サマーセット・ラプソディ』

Gustav HOLST : A Somerset Rhapsody Op.21

ゲーゼ／交響曲第8番ロ短調

Niels Wilhelm GADE : 8.symfoni Op.47

I. Allegro molto e con fuoco

II. Allegro moderato

III. Andantino

IV. Allegro non troppo e marcato

―休憩―

エルガー／変奏曲『エニグマ(謎)』

Sir Edward ELGAR : Variations on an Original Theme Op.36 "Enigma"

Theme
Var.I.(C.A.E.)
Var.II.(H.D.S-P.)
Var.III.(R.B.T.)
Var.IV.(W.M.B)
Var.V.(R.P.A)
Var.VI.(Ysobel)
Var.VII.(Troyte)
Var.VIII.(W.N.)
Var.IX.(Nimrod)
Var.X.(Dorabella : Intermezzo)
Var.XI.(G.R.S.)
Var.XII.(B.G.N.)
Var.XIII.(＊＊＊ : Romanza)
Var.XIV.(E.D.U. : Finale)

指揮：滝本 秀信

京都芸術センター制作支援事業

ロビーコンサート

午後1時15分より開催

グスターヴ・ホルスト／『第1組曲』より2.「間奏曲」、3.「マーチ」

Fl. 間嶋、Ob. 西川、Cl. 野澤、Bn. 石塚、Hr. 北山

ホルストが20世紀初頭に作曲した代表的な吹奏楽作品の1つです。彼は違う旋律を同時に演奏する対位法の技術に秀でており、この曲も各楽章でその効果を見ることが出来ます。普段は大きな編成の吹奏楽で演奏されますが今回は木管五重奏によるアレンジにより第2.3楽章をお聞きください。大編成とは違い各楽器の音色の違いをより鮮明にお楽しみいただけると思います。(宮下)

ユリウス・クレンゲル／ヒムヌス　“賛歌”

“Philo－cello”　秦野、奥村、西山、松浦、多田、高村、岡野

チェロだけのアンサンブル曲として、世界中でもっとも有名なユリウス・クレンゲルのヒムヌス（賛歌）を演奏します。(多田)

グスターヴ・ホルスト／『第2組曲』より1.「マーチ」、4.「ダーガソンによる幻想曲」

Hr. 加藤、千場、中澤　Trb. 中村、松岡、宮下、安田　Tub. 北垣

第4楽章にFl. 間嶋、Ob. 西川、Cl. 野澤、Bn. 石塚、Hr. 北山　タンバリン：籾井

第1組曲と並んでホルストの代表的な吹奏楽作品である第2組曲。今回は第1楽章を中低音の金管アンサンブル、そして第4楽章を先ほど演奏しました木管五重奏のメンバーにタンバリンも加わって「プチ吹奏楽」でお届けします。なおこの第4楽章で絶え間無く続くダーガソン舞曲とグリーンスリーブスの旋律との対位は音楽的にも大変優れていることで知られています。(宮下)

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村　里香様	鈴木　一俊様	玉山　茂夫様
杉本　幸子様	辻　良治様	土屋　健太郎様
安藤　美知穂様	西　英子様	薮田　寛様
鎗本　和弘様	河内　尚和様	奥井　実様
谷口　佳隆様	髙岡　拓也様	八木　彰子様
西坂　壽美子様	和田　之宏様	奥井　実様

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(6月現在)

新規会員募集中です。詳しくは裏表紙をご覧ください。

指揮者

滝本 秀信（たきもと　ひでのぶ）

指揮法を伊吹新一、編曲・和声学を櫛田胅之扶の各氏に師事。国外においてオーケストラ指揮の研鑽を積み、クルト・レーデル（イタリア・レスピーギ音楽院）、リヒァルト・エデリンガー（ウィーン国立音楽大学）、アレクサンドル・ヴェデルニコフ、レオニード・ニコラエフ、イーゴル・シュテッグマン（モスクワ国立音楽院）、アレキサンドル・カントロフ（サンクトペテルブルク・バレエ・シアター）各氏に師事。

ロシアへは度々渡り、リムスキー=コルサコフ作曲『交響組曲シェヘラザード』、チャイコフスキー作曲『交響曲第５番』他を次々に指揮し好評を博す。その後、サンクトペテルブルク・バレエ・シアター『白鳥の湖』全幕公演他でのバレエ指揮、『ナタリー・ショケット・オペラ・コンサート』、京都市交響楽団・大友直人指揮フォーレ作曲『レクイエム』ベートーベン作曲『交響曲第９番』他の合唱指揮、ブルガリア共和国・チェコ共和国での客演指揮等、幅広く活動を続ける。

2013 年ブルガリアを再訪、パザルジック・フィルハーモニック・オーケストラと共に真摯なリハーサルを展開し、熱く感動的な演奏を届け全客席スタンディングオベーションによる絶賛を受けた。2015 年びわ湖ホールにて京都フィロムジカ管弦楽団と共にショスタコーヴィチ作曲『交響曲第 12 番“1917 年”』他で重厚な響きを奏で、また、墨染交響楽団とは、メゾソプラノ歌手と共に組曲『カルメン』をオリジナル構成で届けた。2016 年１月平野一郎氏作曲『八幡大縁起』の世界初演に向けて合唱指揮を務めた。国内においても各地を精力的に訪れ高校・大学・市民オーケストラまで数多くの客演指揮、学校現場での指導や各研究会・関係音楽学院との交流、吹奏楽講師、審査員等、意欲的に活動を続けている。

これまでに、ロシア国立サンクトペテルブルク・シンフォニー・オーケストラ“クラシカ”、同市バレエ・シアター・オーケストラ、ブルガリア国立ブラツァ・フィルハーモニー・オーケストラ、同国パザルジック・フィルハーモニック・オーケストラ、チェコ共和国西ボヘミア交響楽団、京都フィロムジカ管弦楽団、墨染交響楽団、ウィングフィルハーモニー管弦楽団、堺フィルハーモニー交響楽団、あじさい管弦楽団、名古屋工業大学管弦楽団、福井大学交響楽団、大阪市立大学交響楽団、龍谷大学交響楽団、京響市民合唱団、合唱団コールピーポー他、数多くの管弦楽団・吹奏楽団・合唱団の指揮をする。

現在、日本吹奏楽指導者協会１級認定指導者・関西吹奏楽指導者研究会理事・京都吹奏楽団常任指揮者。

曲目解説

遠藤 啓輔(トランペット)

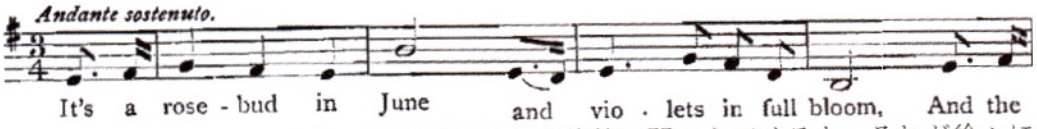
ホルスト／サマーセット・ラプソディ

本日は、イギリスの作曲家の2作品をカップリングする。ホルストは、エルガーより17歳年下ということもあって、エルガーの次の世代のように評価されている印象を受ける。しかし、短命なホルストはエルガーと同じ1934年に死去しており、本来2人は同時代の作曲家としてとらえられるべきだ。にもかかわらずホルストが「エルガー後の世代」と誤解されやすいのは、その音楽の新しさによるところが大きいのだろう。エルガーは、いくら独創性があるとはいえ、やはりドイツ・オーストリア音楽の流れを汲むという評価は動かしようがない。エルガーの『エニグマ変奏曲』が、ブルックナー第4交響曲・第8交響曲の初演者として知られるハンス・リヒターの指揮で初演されたのは象徴的だ。ホルストは対照的に、非ヨーロッパ的音楽を指向した。東洋の舞曲に傾倒したうえに、サンスクリットをはじめとする東洋哲学にまでも関心を持ち、それが彼独自の神秘的な響きへとつながっていった。人気曲『惑星』も占星術への関心が生み出した作品だ。そして、斬新な音楽を実現するもう一つの手段として使ったのが民謡だ。著名な民謡研究家セシル・シャープの大著『サマーセットの民謡』(FOLK SONGS FROM SOMERSET)を素材にして『サマーセット・ラプソディ』を作曲し、これがホルストの出世作となった。

「サマーセット」の語源は「夏に農業ができる所」ということらしい。ここから、イギリスのサマーセット地方は「夏にしか農業ができない寒村」であろうと想像される。実際、この地方の主産業は牧畜のほか果樹や柳(柳細工の材料らしい)の栽培だそうで、そうした厳しい日々の生活の中で民謡が歌われたのだろう。

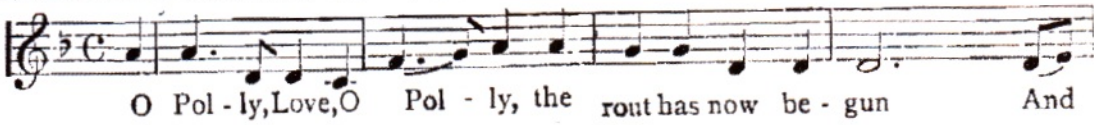
冒頭は、オーボエのソロが「羊の毛刈りの歌」(SHEEP SHEARING SONG **譜例1**)を歌う。この歌は、初夏の訪れを喜び、花々や鳥のさえずりや緑の草原を愛(め)で、老若男女が歌い踊りながら羊の毛刈りへと向かう様を歌っている。この幸福感あふれる歌詞とは裏腹に、旋律は寂しさと憂いに満ちている。現実では叶(かな)う見込みのない願望を歌っているのか？　それとも、自然の恵みの美しさを賛美するほど、人間の醜悪さが引き立ってしまうことの悲しさか？　そもそもオーボエの音色には何かを告発するような凄みがあるので、その悲しさには慄然とさせられる。このオーボエの独白を弦楽器が神秘的な響き(『惑星』の中の「金星」を先取りしている)で受け止めると、まるで慰めるように、ヴァイオリンが瑞々しい音色でこの哀歌を繰り返す。

譜例1
SHEEP SHEARING SONG

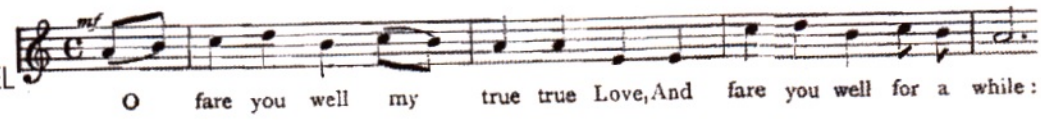


広々とした荒れ地の彼方(かなた)から、自然が発する声のように管楽器の音が断片的に聞こえてくると、それが徐々に形を取りはじめ、行進曲風の「ドイツの高原」(HIGH GERMANY **譜例2**)になる。この歌詞は、恋人との結婚という浮かれた夢と、馬鹿げた戦争に従軍するという嫌悪すべき現実とを交互に歌うものである。この諦念に満ちたマーチが武骨に歌われた後、中低弦とクラリネットが「真の恋人の別れ」(THE TRUE LOVER' S FAREWELL **譜例3**)を艶やかに歌う。遠く離ればなれになる恋人たちの悲しみを歌った、嘆きとため息に満ちた歌詞を持つ。

譜例2
HIGH GERMANY

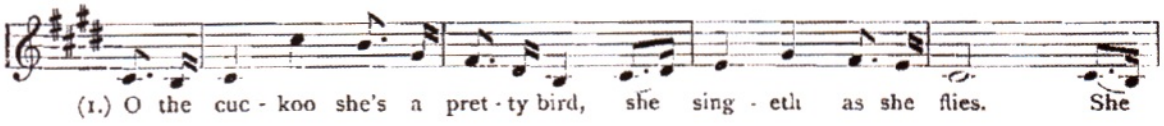


譜例3
THE TRUE LOVER' S FAREWEL



悲しむ人々を追い詰めるように旋律の断片が襲い掛かってきて再び**譜例 2** の大合奏になり、そのまま「カッコウ」(THE CUCKOO **譜例 4**)の旋律に移行する。この歌は、カッコウの声の嘘偽りない美しさを賛美し、自分を裏切った嘘つき男たちの醜さと対比する恨み歌である。この「カッコウ」の大合奏が破滅的なクライマックスを迎えると、再び「金星」のような神秘の世界に変貌する。そして、自然の美しさを賛美する**譜例 1** が、神聖なトロンボーンのユニゾンで降り注ぐ。その後この**譜例 1** はヴァイオリンを中心に瑞々しく歌い継がれるが、ときおり闖入者のように人間の醜さを歌う**譜例 4** が覆いかぶさる。しかし最後は、冒頭と同様にオーボエ・ソロで**譜例 1** が哀しく歌われ、その声がさらに遠くなるようにクラリネットによって受け継がれて静寂へと帰って行く。

譜例 4
THE CUCKOO



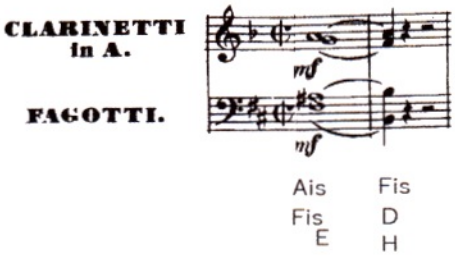
ゲーゼ／交響曲第 8 番ロ短調

着実に愛好者を増やしつつあるニルセンについて「ゲーゼ以来のデンマークのシンフォニスト」と説明している文章をしばしば見かける。しかし、そのゲーゼなる作曲家(しかも、「ガーデ」や「ガーゼ」など、片仮名表記すら定まっていない)はニルセン以上に知名度が低い。しかしながら、ゲーゼは輝かしいキャリアを誇る大音楽家だ。ゲーゼは 1817 年生まれで(選曲後に人から指摘されて初めて気付いたが、今年は図らずもゲーゼの生誕 200 周年だった)、交友のあったシューマンより 7 歳年下。20 歳代で作曲した第 1 交響曲がメンデルスゾーンによって絶賛され渡独、なんと名門ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者と同地の音楽院教授になった。そのままドイツの大作曲家として音楽史に名を遺したかもしれないが、1848 年にデンマークとプロイセン（ドイツ)が戦争(スレースヴィ戦争)を始めたためデンマークに帰国。その後もたびたびドイツに赴いて自作を指揮したが、再燃した戦争が彼の音楽活動を妨害した。

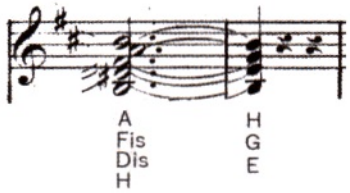
このように、ゲーゼの生涯にはデンマークの歴史が影を落としているので、デンマークについて簡単に触れておきたい。大方のイメージは「デンマーク＝童話作家アンデルセンの故郷」であろう。あるいは僕のような愛知県出身者は、酪農に力を入れる安城市が「日本のデンマーク」を自称していることから「デンマーク＝酪農」といったイメージを持っているかもしれない。もちろん、それらはデンマークのごく一面に過ぎない。僕の知識も浅薄なものだが、デンマークはスウェーデンと覇を競った北欧の大国、それも、グリーンランドにまで至る北海の島々を支配した海の王国という側面も重要だと思う。そして政治や文化の面では、南に隣接する大国ドイツと微妙な関係を持ち続けた。ドイツの先進的な知識を積極的に導入する一方で、完全なドイツ化は拒み続けた。18 世紀、デンマークに渡って政治改革を断行したドイツ人ストルーエンセが、結局は失脚して惨殺された事件は、デンマークのドイツに対する複雑な感情を象徴しているように思われる。また、両国はユトラント半島スレースヴィ地方に領土問題を抱えていて、戦争の原因にもなった。こうした、海の王国としてのイメージと、ドイツとの微妙な関係を知っておくことは、ゲーゼの音楽を理解するうえでも助けになると思われる。

本日演奏する第 8 交響曲はゲーゼ最後の交響曲で、前述のようなデンマークのイメージが反映しているように思われる。この曲は冒頭から荒海を突き進むような力強い推進力が魅力である。そして、北欧音楽らしい瑞々しい響きや情熱的な旋律とともに、曲の端々にドイツ・オーストリアの古典音楽的な美しさが聴かれる。そればかりではない、ゲーゼがドイツ音楽とりわけブラームスに影響を「与えた」としか考えられない斬新な表現さえ聞かれるのだ(ブラームスの交響曲はすべてゲーゼ第 8 発表後の作品である)。

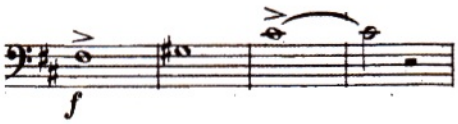
第1楽章は、フル・オーケストラが4分音符を2発撃ち込んで印象的に始まる。発想の源泉はベートーベン『英雄』にあろう。しかし、1発目は短調、2発目は長調の和声を打ち込むという激烈な色彩の変化は、ゲーゼの偉大な独創性だと思う。そして、どこか不安を湛えた序奏から荒海のように激しい第1主題部へと突入する瞬間、不協和音から短調の和音への変化が聞かれる(**譜例5**)。この印象的な和声変化は、シューベルト『未完成交響曲』第1楽章の、展開部の開始を告げる和声変化(**譜例6**)を髣髴とさせる。シューベルトからの影響は、この一瞬だけでなく、オーケストレイションについても指摘できる。それはトロンボーンの多用だ。宗教音楽の場で重宝されたトロンボーンは、世俗的な管弦楽作品に使用されることはまれであった。しかしベートーベンが交響曲の一部にトロンボーンを使用し、シューベルトの『未完成』『グレイト』の2大交響曲に至っては全楽章に亘ってトロンボーンが活躍するようになった。ゲーゼの友人シューマンもトロンボーンを多用したが、トロンボーンの宗教的気高さを強調している点はベートーベンに近い。それに対してゲーゼは、トロンボーンを旋律楽器として使っている点でシューベルトに近い印象を受ける。しかもゲーゼは、早くも第1交響曲からトロンボーンを大活躍させているという点で、いっそう先進的だ。



譜例5　ゲーゼ第1楽章



譜例6　シューベルト『未完成』第1楽章



譜例7　ゲーゼ第1楽章

第1主題は悲劇の叙事詩を語るように情熱的な旋律と、荒波のように激しい伴奏、そして、簡潔な中にも悲壮感を持った印象的な上昇音型(**譜例7**)で構成される。**譜例7**は即座にグリーグ作曲『ペール・ギュント』の「オーゼの死」を思い出させるが、もちろん、ゲーゼがグリーグに影響を「与えた」のだろう。グリーグはノルウェー出身だが、青年時代にコペンハーゲンでゲーゼの指導を受けている。

激烈な第1主題とは対照的に、第2主題は金管の柔らかく温かい讃美歌風の旋律が聞かれる。そして、展開部ではカノン風の複雑な絡み合いに聴き応えがある。再現部、コーダを経て、最後は管楽器が短調の和音を吹き鳴らして印象的に閉じられる。

第2楽章はキビキビとした動きが魅力的な3部形式の楽章。スケルツォ楽章のようでもあるが、端正な雰囲気はスケルツォ(諧謔曲)とは異なり、むしろインテルメッツォ（間奏曲)のような印象を与える。トロンボーンを休ませた軽めの響きもその印象を強くする。ゲーゼの第7以前のほとんどの交響曲には「Scherzo」と明記された荒々しい楽章がある。第8は敢えてスケルツォにしないという新機軸を打ち出したのだろう。ブラームスは交響曲にスケルツォを書かず、代わりにインテルメッツォを書いたが、これはゲーゼ第8からの影響の可能性がある。もっとも、ゲーゼのこの第2楽章は、響きの軽快さとは裏腹に、ほの暗い悲壮感に支配されている。そして、意表を突く総休止やティンパニの静かなソロなど、大胆な表現に驚かされる。ちなみに、ゲーゼの全交響曲はティンパニ以外の打楽器は使用されていない。そのかわり、ティンパニの使い方はソロイスティックで斬新である。

中間部は主部とは対照的に、幸福感にあふれた温かな音楽になる。

続く**第3楽章**は、様々な点で第2楽章と対照的。ゆったりとしたテンポを取り、編成は前楽章と逆にトランペ

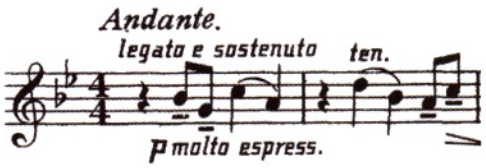
ットを休ませトロンボーンを重用する。この一風変わった低音重視の楽器編成は、ブラームスの第3交響曲第2楽章に影響を与えたと思われる。そして、この楽章でのトロンボーンの扱いは他の楽章とはやや異なる。ゲーゼは、両端楽章ではバス・トロンボーンを主体にしてベースラインを強化しているのに対し、この楽章ではテナー・トロンボーンを主体にして柔らかく歌うような表現を追求している。また、この楽章も3部形式をとるが、雰囲気の明暗も第2楽章とは対照的である。この第3楽章は、幸福感にあふれた音楽で始まり、運命の過酷さを思わせる峻厳とした中間部を経て、再び温かな歌へと帰っていく。

終楽章の**第4楽章**は、悲壮感を帯びた**譜例7**で力強く始まる。暗い情熱にあふれた第1主題は装飾音符を多用した古色蒼然としたもので、古典を通り越して、バロックやルネサンスの音楽を聴いているような錯覚を受ける。第2主題は、ゲーゼが得意とする木管をブレンドさせた響き魅力的だ。そして、やはりバロックのリコーダーのような古めかしい印象を与え、そして物悲しい。しかしコーダは金管を主体とした輝かしい英雄的な音楽に変貌する。そして最後は第1楽章の最後と同様、トロンボーンを主体とした金管の圧倒的なロングトーンによって閉じられる。この斬新な終わり方は、ブラームスの第2交響曲に決定的な影響を与えたと考えられる。

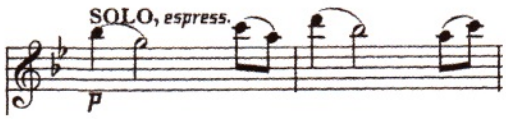
1871年にこの曲を発表した後、ゲーゼはさらに20年近く生きたが、新たな交響曲は発表しなかった。この曲はゲーゼの交響曲の到達点としてふさわしい密度と魅力を備えていたからだろう。

エルガー／変奏曲『エニグマ(謎)』

変奏曲とは、曲の冒頭でテーマが示され、そのテーマを少し変化させた曲を次々と歌い継いでいく音楽の形式である。本日演奏する「エニグマ」変奏曲の場合は、テーマは**譜例8**のように始まる。そして、第1変奏では**譜例9**、第2変奏では**譜例10**、第3変奏では**譜例11**といった要素が聞かれ、これらがテーマ(**譜例8**)を少し変化させたものであることが容易に分かる。このような変奏が、実に第14変奏までなされる。

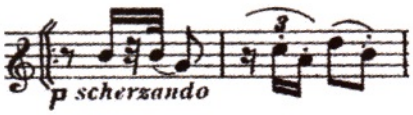


譜例8　エニグマ変奏曲・テーマ



譜例9　エニグマ変奏曲・第1変奏

譜例10　エニグマ変奏曲・第2変奏



譜例11　エニグマ変奏曲・第3変奏

この曲の「エニグマ(謎)」という愛称は、作曲者エルガーが「この曲には小さな謎と大きな謎が秘められている」というコメントを発したことによる。「大きな謎」はいまだに解明されていないそうなので、聴衆一人一人が自由に考えていけばよいだろう。そして、「小さな謎」は各変奏のモデルとなるエルガーの友人たちとされる。エルガーは妻アリスと、友人たちの性格やしぐさをピアノで表現して遊んでいるうちに、この変奏曲の作曲を思いついたらしい。モデルになった友人たちは各タイトルにイニシャルなどでヒントが示され、ほとんどが判明しているそうだ。様々な解説本で、各変奏のモデルが誰で、その友人とのどのような思い出を描いたものなのか、異説も含めて丁寧に説明されているが、ここでは敢えてそれを書くのはやめようと思う。音楽鑑賞が謎当てゲームになりかねないからだ。しかも、指折り数えたとしても「えーっと、今は第12変奏(疲れた！)だから"チェロ

を弾く室内楽仲間”か。でもチェロのソロが活躍する曲はさっき終わっちゃったよ。もしかして数え間違えた？」となるのが落ちで、このような聴き方で変奏曲が楽しめるとは僕には思われない。冒頭のテーマが多様に変化していく面白さを素直に楽しみ、その背景には、エルガーを支えた個性豊かな友人たちがおり、エルガーは愛情と敬意に満ちた音楽によって彼らの友情に応えた、それさえ知っていれば充分だと思う。そもそも初演時に、エルガー自身が、モデルになった友人たちについて「個人的な事柄なので公表する必要はない」と書いているそうだ。ただし付言しておくと、僕たち演奏者は、マエストロ滝本の指導のもと「H. D. S-P. さんがピアノの練習をしながら気分が昂(たかぶ)ってくるイメージで」「踊り疲れて寝てしまったドラベッラちゃんがハッと目を覚ますように」「G. R. S. さんのペットのブルドッグがバシャバシャ泳いでいる様子だから元気よく！」などと、定説を踏まえつつもアレンジしながら音楽の性格設定をして練習している。映画でも芝居でも、披歴されることのない背景や人物像までしっかり考えているかどうかで、演技の説得力が俄然違ってくる。音楽も恐らく同じだと思う。

と、偉そうに言っておきながらも、モデルについて知った上で聴くと良いと思われる曲が私見では3曲ある。

一つは第13変奏で、「＊＊＊」と題されていてイニシャルすら明かされていない。極めて異彩を放つ曲で、指折り数えていなくても「問題の曲に入った！」と簡単に気付くことだろう。「小太鼓用の(硬い)バチを使って」と指定されたティンパニのトレモロが不気味に響く中、1本のクラリネットが緊張感に満ちたソロを吹き、続いてトランペットとトロンボーンの6人が同じ旋律を静かに再現する。ラッパ2本あれば音楽が成り立つのに、あえて6人のユニゾンにした所が良い。管楽器は大人数で同じ旋律を静かに吹くと、寂しい荒れ野が広がって見えるような効果を発揮するのだ。そして、「＊＊＊」が誰なのか断定されていない、ということを知っておいて良いと思う。ティンパニが汽船のエンジン音に似ており、管のソロがメンデルスゾーンの序曲『静かな海と楽しい航海』に似ている(？)として、船旅の思い出に関連した人物や、遠く海外に移住した人物とする説がある。しかし私見では、メンデルスゾーンの序曲と「＊＊＊」のソロは、リズムが似ているというだけで、曲の雰囲気はまるで異なる。それよりはむしろ、スメタナ『我が祖国』の女戦士「シャールカ」の、戦争の始まりを予告する不気味に静かな音楽の方が、雰囲気もオーケストレイションも遥かに良く似ていると僕には思われる。エルガーの個人的交友関係という次元を超えた、人類の苦悩を背負って立つ音楽なのではないだろうか。

そしてあと二つは、冒頭のテーマに続けて演奏される第1変奏の「C. A. E. 」、そして終曲(第14変奏)の「E. D. U. 」だ。C. A. E. はエルガーの妻キャロライン・アリス・エルガー、そしてE. D. U. はエルガー自身で、妻アリスから「エドゥ」と呼ばれていたことに由来するとされる。終曲 E. D. U. には第1変奏 C. A. E. のテーマが印象的に引用されており、両者の深い関係が存分に表現されている。エルガーとアリスとの関係の深さは、単なる夫婦愛で片付けられるものではない。2人は音楽を介して知り合ったが、およそ釣り合いの取れたカップルには見えなかったであろう。エルガーは楽器店の息子で、プロテスタントが主流のイギリスにおいては少数派のカトリック教徒。作曲も演奏もほとんど独学で、一流の作曲家を目指してはいるものの、婚約の時点では何らの業績もなかった。方やエルガーよりも8歳年上のアリスは陸軍少将の一人娘。階級差別の激しいヨーロッパにおいてはおよそ考えられない結婚だったと想像され、当然、周囲はこの結婚に反対、結婚生活も経済的に大変であった。アリスは涙ぐましいほどの努力でエルガーを支え、五線紙を手書きで作成してさえいたという。

1898年から作曲され、翌年に初演。これが大成功し、エルガーはようやく一流の作曲家となった。時にエルガー42歳。この成功は苦労を共にしたアリスへの最高のプレゼントとなったことだろう。

〔参考文献〕水越健一『エドワード・エルガー　希望と栄光の国』2001、武田書店

京都フィロムジカ管弦楽団

Kyoto Philomusica Orchestra

Leader
坂　茉莉江※

Violins
秋本　怜菜
稲葉　道一
小幡　拓也
八木　愉希絵
渡辺　達之輔
飯田　俊也・
桑元　紳・
杉山　貴俊・
高谷　祐介・
谷内　優子・
中島　幸・
西邨　奈穂・
安原　由克子・
米田　勇樹・
渡邉　隆寿・
内田　佳子※
坂　茉莉江※
福澤　敬子※
山田　貴子※

Violas
小川　紀之・
甲斐　幸子・
高原　友洋・
富安　翔太・
古田　直道・
丸山　圭一・
中村　知瑞※

Cellos
奥村　友梨香
多田　進
西山　峻司
秦野　貴生
松浦　悟子
松浦　由香
高村　誠・
岡野　正義※

Double Basses
茂原　尚樹
田中　明江
田中　郁太郎
福島　史子
藤井　輝之
日浦　啓全・
丸山　拓史・

Flutes
高松　香陽子
間嶋　美波
(Piccolo)
御園生　香
山口　佳美
木村　由希子・
(Piccolo)

Oboes
西川　紗希
平井　菜那

Clarinets
植山　彩花
浦野　幸栄
榎本　明日香
野澤　真以

Bassoons
阿部　冬樹
石塚　有里子
大槻　萌絵
近藤　紀宏※
(Contra Bassoon)

Horns
加藤　実可子
北山　絵里
中澤　美帆
千場　信孝
渡邉　つぐみ
渡辺　悠
野口　雅史・

Trumpets
遠藤　啓輔
北山　武志
瀧澤　実帆

Trombones
中村　三鈴
宮下　秀行
松岡　大起・

Bass Trombone
安田　泉穂

Tuba
北垣　菜々実・

Timpani
籾井　渉※

Percussion
浅川　大輔※
大澤　薫※
山城　和也※

・：団友
※：客演奏者

団長
多田 進

事務
西村　浩

客演コンサートミストレス

坂　茉莉江　1989年、大阪生まれ。相愛大学音楽学部を特別奨学生で卒業。モーツァルテウム音楽大学大学院を満場一致の最優秀にて修了。第60回全日本学生音楽コンクール大阪大会高校の部第1位、並びに全国大会第3位、大阪国際音楽コンクール高校の部第2位、第3回神戸新人音楽賞コンクール優秀賞などを受賞。「モーツァルト生誕250周年記念関西フィルコンサート」にて故羽田健太郎氏のピアノと共演、「オーストリア・ボーデンゼーフェスティバル」にてファジル・サイ氏のピアノと共演する。
これまでにソリストとして関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団と共演、多数のアマチュアオーケストラとも共演を重ねる。2016年ザ・フェニックスホールにて「第66回朝の光のクラシック」坂茉莉江ヴァイオリンリサイタルを開催。
中島美子、本多智子、小栗まち絵、大谷玲子、イゴール・オジム、ウォンジ・キム・オジムの各氏に師事。2015年9月、日本に帰国し、ソロ、室内楽奏者として幅広く活動している。

弦トレーナー

岩井　英樹　名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎　雅夫　京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

第４２回定期演奏会

2018年1月21日(日)　八幡市文化センター　大ホール

ドヴォルジャーク／交響的変奏曲
ブラームス／交響曲第2番　　指揮：柴 愛

新入団員随時募集中

～私たちと一緒に演奏しませんか? まずはお気軽に見学にお越しください。 団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。

2018年度冬季の演奏会で、ブルックナーの大曲・交響曲第５番の演奏を目指しており、それに向けて団員を増強しています。一緒に演奏したい！　という多くの皆様のご参加をお待ちいたしております。「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。

＜募集パート＞

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス　**（ヴァイオリン・ヴィオラ急募！！）**

オーボエ・ファゴット・トロンボーン・テューバ・打楽器　※テューバ・打楽器は諸条件について要相談

〔入団資格〕練習に出席できること。年齢制限はありません。学生の参加も歓迎します。

〔練習日時〕毎週日曜日（午後1時～午後5時）　　春と秋に練習合宿（大津市内。合宿費は10,000円程度）

〔練習場所〕京都芸術センターなど京都市内各所のほか、大津市など

〔諸 費 用〕活動費：3,000円/月　演奏会参加費：20,000～30,000円（学生・初回参加の方には割引あり）

入団・見学に関するお問い合わせ先　E-mail：recruit@kyotophilo.com

「友の会」会員随時募集中

フィロムジカの活動を応援してくださる方を募集しています

【年会費】　１口　1,000円

【期　間】　ご入会いただいた月より１年間

【特　典】　1．期間内の定期演奏会に、１口につき１名様を無料ご招待
2．その他演奏活動のご案内
3．定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ　Tel&Fax 075-605-0123 (西村)　E-mail：tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

http://www.kyotophilo.com/

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。